



⑰ 危機と国際政治

不確実性を生きる

私たちは、未曾有の不確実性の中にいる。1週間後、自分たちがどうなっているか不明だし、1カ月後に正常な生活が送れている自信はない。パンデミックは私たちの社会ネットワークを攻撃し、ヨーロッパとアメリカはすでに麻痺状態。もしかしたら日本も首都陥落が近いのかも。人の往来が止まり、生産活動が止まり、次は物流が止まるのかもしれない。

とりあえずお米とトマト缶と乾燥豆を買ったところ、SNSに書き込んだら、「オススメは緑豆!」と中国人の友達がレスポンスしてきた。ご飯、おかゆ、デザートと何にでも使えるから、と。なるほどと感心していたら、日本人の友人が「もやしも作れる」と合いの手を入れる。実際に作った写真付きだ。楽しそう!

母の友人にあきれながら画面をのぞきこんでいた娘も、「いま強いのは家庭菜園持ってる人だよ」と、ご近所のおばあちゃんを褒め称える。価値観の転換。あちこちでテレワークが始まり、会議はもっぱらオンライン開催。この危機の先には、どうやらまったく新しい社会のあり方が待っている。

国ごとに違う真実

科学の発展のスピードを踏まえれば、人類は1~2年後には新型コロナを克服するだろう。しかし、それを発端とする経済危機がど

こまで広がるかはわからない。世界大恐慌の発生を懸念する声もある。

他方でこの危機は、国家単位で動く伝統的な国際関係を組み替えるほどのインパクトは持たない。新型コロナは、人類の共通の敵となってその大同団結を促すのではなく、むしろすでに始まっていた国際構造の再編を加速させる可能性が高い。それが中国から始まり、西側先進国を直撃したことが、おそらく歴史上は決定的な意味を持つ。

今は一時的になりを潜めているが、中国と西側諸国間の猜疑心は確実に強まっている。各国の人々は、初動を遅らせ世界にウイルスをばらまいた中国政府に憤る。アメリカでは対中集団訴訟の動きが拡大する。スペインは中国製の検査キット6万点を返品した。WHOのテドロス事務局長は、中国に迎合して有効な対策を怠ったことで信用を失墜し、危機対応の中核を担うべき国際組織は機能不全状態だ。

対する中国では、新型コロナへの対応にも政治的な色が濃く出る。

習近平政権は1月下旬から国内で徹底的な抗戦を打ち出し、果敢な指導者としての政治的なアピールを始めた。奇妙なことに、中国ではそれとほぼ平行して、「わが国における新型コロ

ナの蔓延は米国の陰謀だ」という奇説が、科学的な論拠を伴ってはやり始めた。例えば、中国の知り合いが送ってきた情報にはこうあった。新型コロナにはA~Dの4つの型があるが、中国にはCしかなく、米国では全て見つかった。この事実は、ウイルスの発生源が中国ではなく米国であることを証明している、と。

実際には、ウイルスの突然変異はきわめて早い。患者から採取されたウイルスのDNA解析結果は公開され、系統図も描かれており、武漢のウイルスから他の全てのタイプが発生したことがわかっている。

だが、中国ではこうしたデマは統制されていない。中国外交部スポークスマンの趙立堅は、ウイルスが米軍によって武漢に持ち込まれた可能性があるとして指摘した。米国陰謀論は、中国ではすでに「社会的真実」になっている。

危機の歴史的意义

西側諸国から見れば、世界の救世主としてマスク外交を展開する中国は、その「異質性」をますます際立たせている。つまり、同じ課題に直面しながら、私たちの間の「心の距離」はどんどん遠ざかる。これは国際政治が重大な転換を迎える時の、いつものパターンだ。

ただし、今回の危機で社会のあり方は確実に変化しており、かつてのようなグローバル化は、むしろリスクと認識されるようになった。この変化が伝統的な国際政治と組み合わさって、われわれは数年後には、きっと新しい世界を目にすることになる。その歴史的な方向性を探りながら、この危機をぜひたくましくサバイブしていこうではないか。

(益尾知佐子・九州大学比較社会文化研究院准教授)

新型コロナをサバイブする